



# A.A.C (コミュニケーションの補助・代替手段)

南大阪療育園心理相談員 広川 律子

今回より3回にわたり、コミュニケーションの補助代替手段の問題について、世界的な流れもあわせてご紹介したいと思います。

## ISAAC国際会議の報告

まず、最初は、新しい話題から、第6回ISAAC国際会議の様子をお伝えしましょう。ISAACとは、International Society for Augmentative and Alternative Communicationの略です。つまり、コミュニケーションの補助・代替手段(AAC)に関する国際学会です。この学会は、1983年に第1回モントリオール(カナダ)で開催されて以来、昨年10月にオランダのマーストリヒトで第6回を迎えたものです。

日本からは、私たち日本サウンズ アンド シンボルズ研究会のメンバー6名(鳴門教育大学 末田統氏ら)をふくめて10人、この分野でのわが国での研究の立ち遅れを反映する参加状況です。

この学会でのテーマは、AACにしぼらりており、まして日頃、障害者のコミュニケーションという難題にとりくんでいる人達ばかり、参加者はことばや国の違いを越えてすぐのうちとけて、自分の関心事についてもかなりつつこんだ議論をすることができ、会場には独特の一体感があふれていました。

学会ではAAC-user'DAYが一日設けられ、ヨーロッパ各国から多くのAAC-userたちが参加し交流を深めたり、研究したりというようなとりくみがあった。これには多くのAAC-userの子どもたちが参加していて驚かされた。ある子どもは、南アフリカから母親と介助者と一緒にやってきたことを文字盤でおしえてくれた。また、ある子どもは、寄宿舎の看護婦さんと母親と一緒にフェリーに乗ってフィンランドからやってきた、とこともなげに、パソコンで教えてくれました。こんな子どもたちの姿に圧倒されっぱなしのuser'DAYでした。そして、夜は、たとえば、AAC-userと非障害者の混成ロックバンド“ウインド フォース”の迫力あふれる演奏、ステージの最後は参加者と一体になってのco-mmuni-ca-tionの大合唱であった。

演題発表では、AAC-user自身の発表もあり、北欧、ヨーロッパの障害者の旺盛な自立心とそれを支援する社会のふところの深さを見る思いがした。私たち研究会のメンバーはサウンズ アンド シンボルズの臨床結果と先に開発したコンピュータプログラム(商品名・とくでっせ、Ver.1)に関する結果をポスターセッションにて発表し、“KANA”(仮名文字)の入った日本のAACということで多くの参加者の関心を集めた。また、スウェーデンのS I HはP I C (Pictogram Ideogram Communication)を自国むけに改良し、コンピュータ・プログラム化し、AACとして有効に活用されている様子がビデオセッションにて紹介された。ブリス・インスティテュートからは、シンボルを用いた性教育の実際がポスターセッションで発表され、いずれも大いに触発されるところがあった。AACが障害者の社会生活のみならず、人格形成やsexualityの確立に活用されており、わが国でもAACの概念を今一度、深め、検討し、その上での研究、技術開発が必要ではないかと考えさせられた。



ポスターセッション風景  
S&Sの発表も行われた



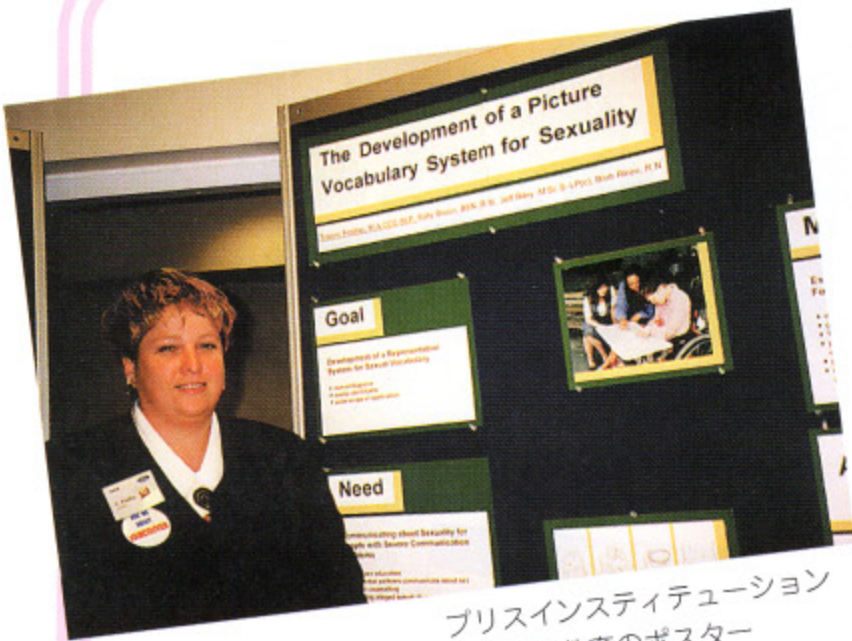
# 〈その1〉



SIH (スウェーデン) による  
デモンストレーション



イスラエルから参加した少年



ブリスインスティテューション  
による性教育のポスター



AAC-userたちのロックバンド  
“ウインド フォース”



フィンランドから参加した少年